

野 田 山 遺 跡

1979

大分市教育委員会
三井不動産株式会社

目 次

| | |
|-------------------|----|
| I 調査にいたる経過 | 2 |
| II 遺跡の立地と環境 | 5 |
| III 調査の概要 | 5 |
| IV 調査の結果 | 6 |
| 1. 遺構 | 6 |
| 2. 遺物 | 9 |
| V まとめ | 14 |
| 1. 遺構 | 14 |
| 2. 遺物 | 15 |
| 図 版 | |

例 言

1. 本書は、大分市教育委員会が、三井不動産株式会社の開発申請による、野田山遺跡発掘調査の報告である。

2. 発掘調査にあたっては、県文化課の指導および助言、協力をうけた。

調査主体 大分市教育委員会

調査委員

松 本 喬 義 (大分市教育委員会教育長)

森 信 男 (大分市教育委員会社会教育課長 前任)

安 部 幸 人 (大分市教育委員会文化財係長)

調査員

牧 尾 義 則 (大分県文化課主事)

杉 崎 重 臣、 小 野 雅 途、 講・岐 和 夫 (大分市教育委員会文化財係)

調査補助員 田 口 恒 憲

事業主体

中 原 壮 六 三井不動産(株)大分支店長

3. 調査ならびに本書作成にさいし、大分市文化財審議員の富来隆氏(大分大学教授)、賀川光夫氏(別府大学教授)の助言と、広瀬文隆氏の協力をえた。

4. 本書の作成は杉崎・牧尾・講岐があたった。

序 文

当遺跡は、国立大分医科大学の建設に伴なう学園都市開発申請に基づき、制約された日程の中で、予備調査・本調査を実施いたしましたが、調査にあたり多くの方々の御協力により成果をあげることができましたことを、衷心より感謝いたします。

また調査に際し、御指導くださった諸先生方をはじめ、とくに文化財に深い御理解をいただいた三井不動産株式会社に、心から謝意を表しますとともに、今後とも文化財保護に対し、御協力方をお願いする次第であります。

なお、本報告書が考古学の解明と文化財に対する理解、啓発等に御活用いただければ幸いです。

昭和 54 年 3 月

大分市教育委員会

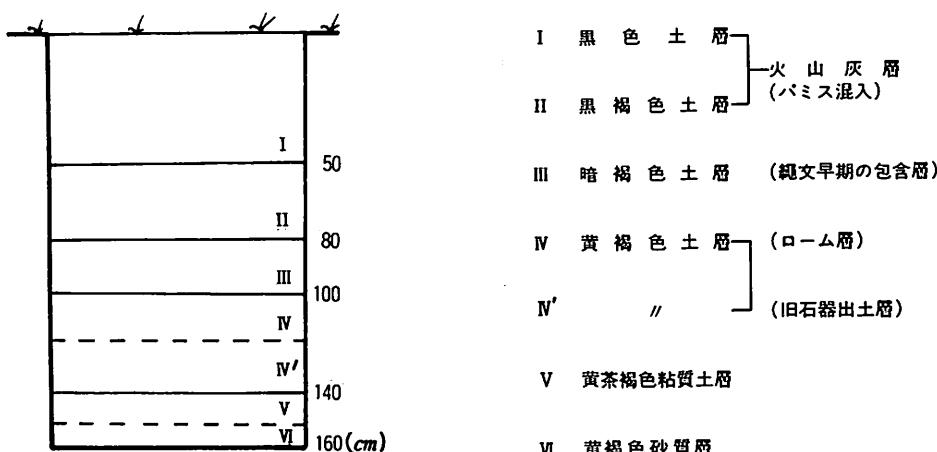
教育長 松本 喜義

I 調査にいたる経過

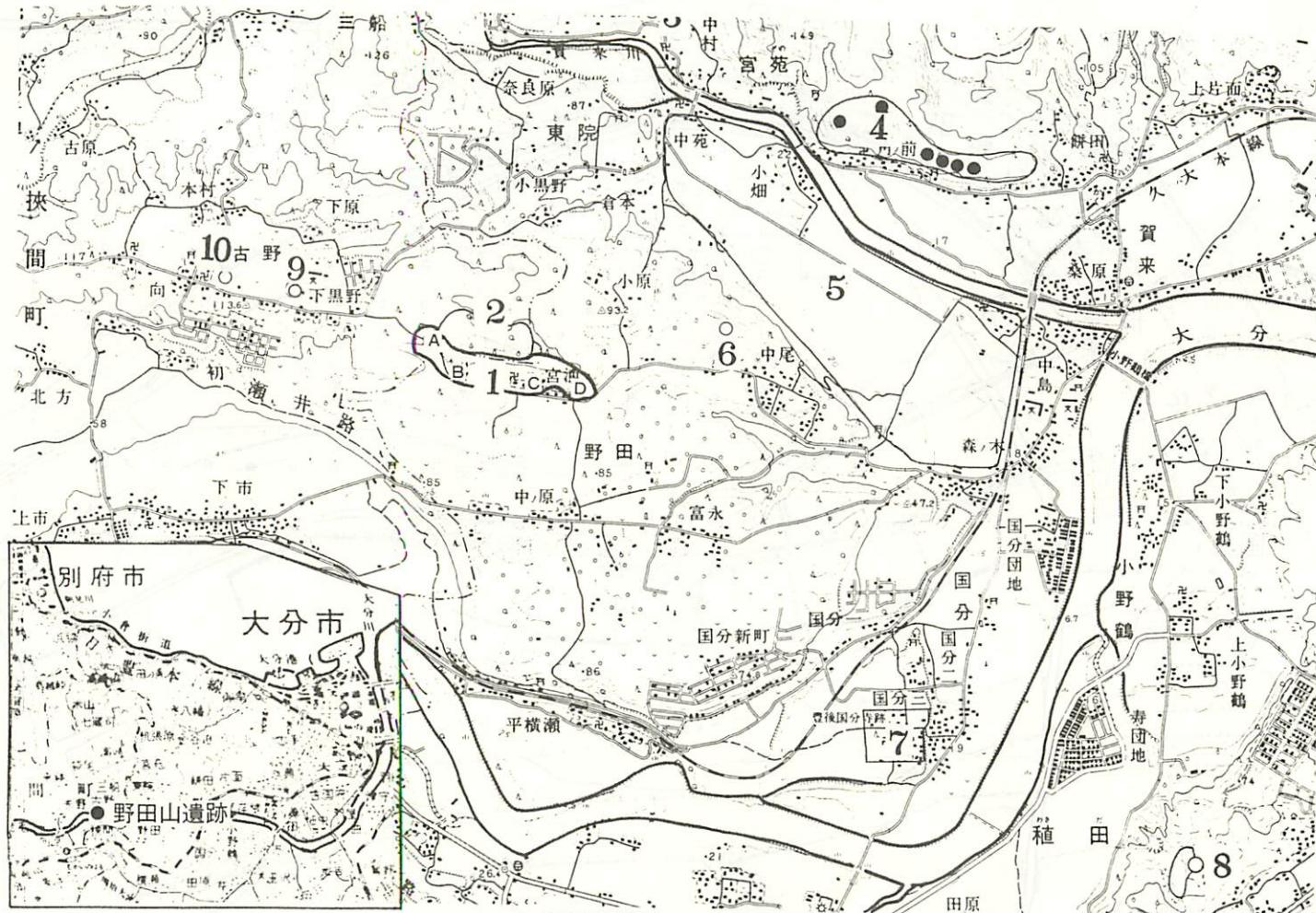
三井不動産株式会社の野田山学園都市開発申請により、昭和52年6月20日から8月10日まで、第1次および第2次の調査をおこなった。学園都市開発予定地の隣接地たる大分医科大学敷地内は昭和49年に大分県文化課による下黒野遺跡発掘調査の結果、旧石器・縄文・弥生の各時代にわたる石器・土器片が多数発掘されている。よって、開発予定地である 209.935 m²の広大な土地、その殆んどにわたって雑木・竹・雑草のおいしげる山林を、全面踏査し、そのうち遺跡の存在する可能性があると思われる地区を A・B・C・D 地区としてえらび、グリットによる調査をおこなった。

第1次調査はグリット(ベンチマークより、10mごとに2m×2m)による調査を行ない、第2次調査は A 地区の集石を中心にしての拡張調査をおこなった。

基本層序

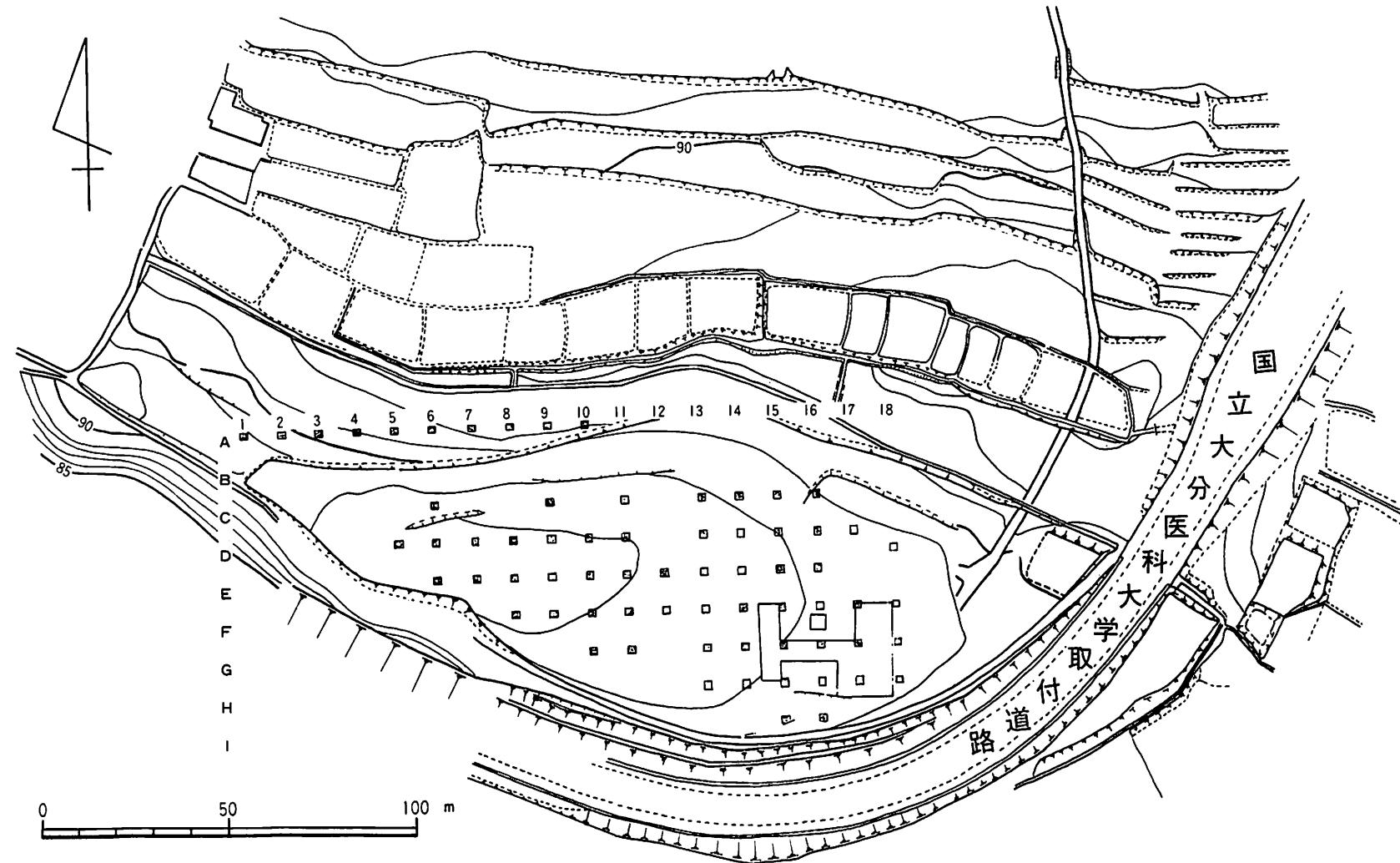


第1図 野田山基本層序



第2図 野田山周辺の遺跡分布地図

1. 野田山遺跡 2. 下黒野遺跡 3. 千代丸古墳
5. 賀来条里跡 6. 中尾古墳 7. 豊後国分寺跡 8. 漆間横穴古墳群
9. 由布川小学校遺跡 10. 古野遺跡



第3図 野田山遺跡（A地区）グリッド配置図

Ⅱ 遺跡の立地と環境

野田山遺跡は大分市の西端にあって、挾間町に接し、賀来川と大分川にはさまれた舌状台地（標高 91m）にある。大分川を南にし、賀来川を北にひかえ、北西に高崎山を、遠くは由布・鶴見の峻峯を望むことができる。

遺跡に隣接して北に下黒野遺跡（大分県文化課発掘調査、昭和49年）、賀来川をへだてて千代丸古墳があり、東南には豊後國分寺跡が存在する。

本遺跡は下黒野遺跡、庄ノ原遺跡とともに旧石器・縄文・弥生各時代にわたる貴重な遺跡であり、また北に接して挾間町赤野弥生遺跡へと広がっている。当時の生活舞台としては、はなはだ良好な地勢であったと言えよう。



Ⅲ 調査の概要

野田山遺跡遠景

第1次調査を昭和52年6月20日から7月7日まで、第2次調査を7月18日から8月10日までおこなった。

第1次調査

開発予定面積 209.935m²を、遺跡可能地区としてA・B・C・Dの4地区にわけ、各地区とも10m方眼を組み、うち2m×2mの小グリットについて発掘調査をおこなった（他の地域については踏査を実施した）。

約1200m²にわたる調査の結果、B・C・D地区においては遺構・遺物の検出ができなかったが、A地区において東220m、南70mの広さにわたり、各グリットから旧石器、縄文早期の集石遺構および土器等が検出できた。当地区を重視し、第2次調査を実施した。よって、発掘面積は280m²である。

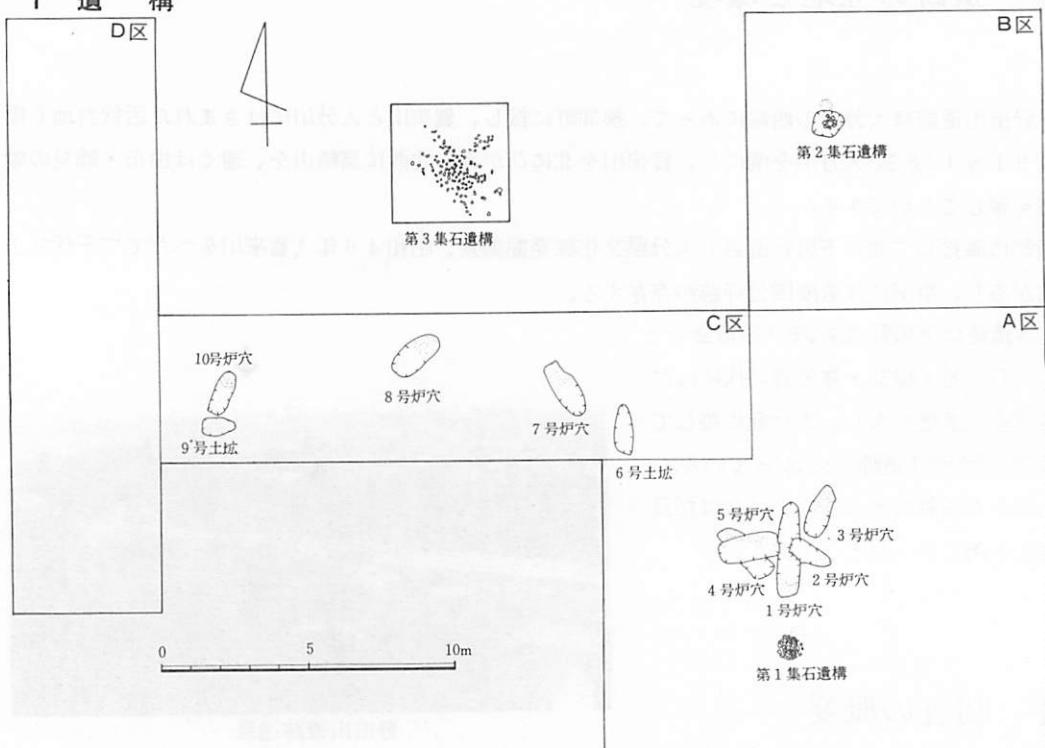
第2次調査

第1次調査の結果、A地区が有望な遺跡であることが判明した49.4m²について、発掘調査を実施した。

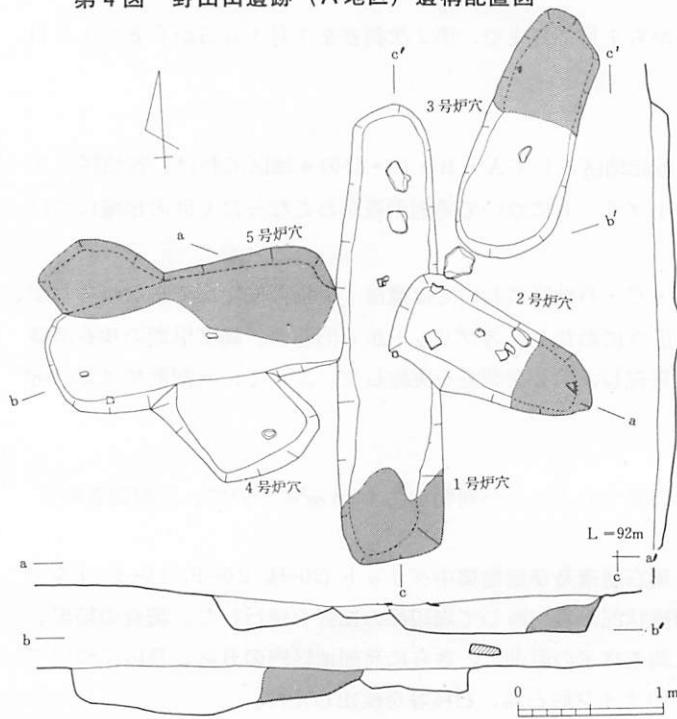
調査は第1次調査で明らかとなった集石遺構及び遺物集中グリット(20-H, 20-F, 19-F)を中心にこれを拡張し、さらに土塙等の遺構状況から判断して周辺部の拡張を続行した。調査の結果、縄文早期の遺構・遺物が確認できた。調査終了の直前に、さらに発掘地区内のB区、D区についてローム層を掘り下げ、旧石器時代後期のナイフ形石器、石核等を検出した。

IV 調査の結果

1 遺構



第4図 野田山遺跡（A地区）遺構配置図



第5図 第1～5号炉穴実測図

長楕円形状のプランを呈する第1～10号土塚の覆土は黒褐色であり、覆土中より縄文早期の土器が出土している。

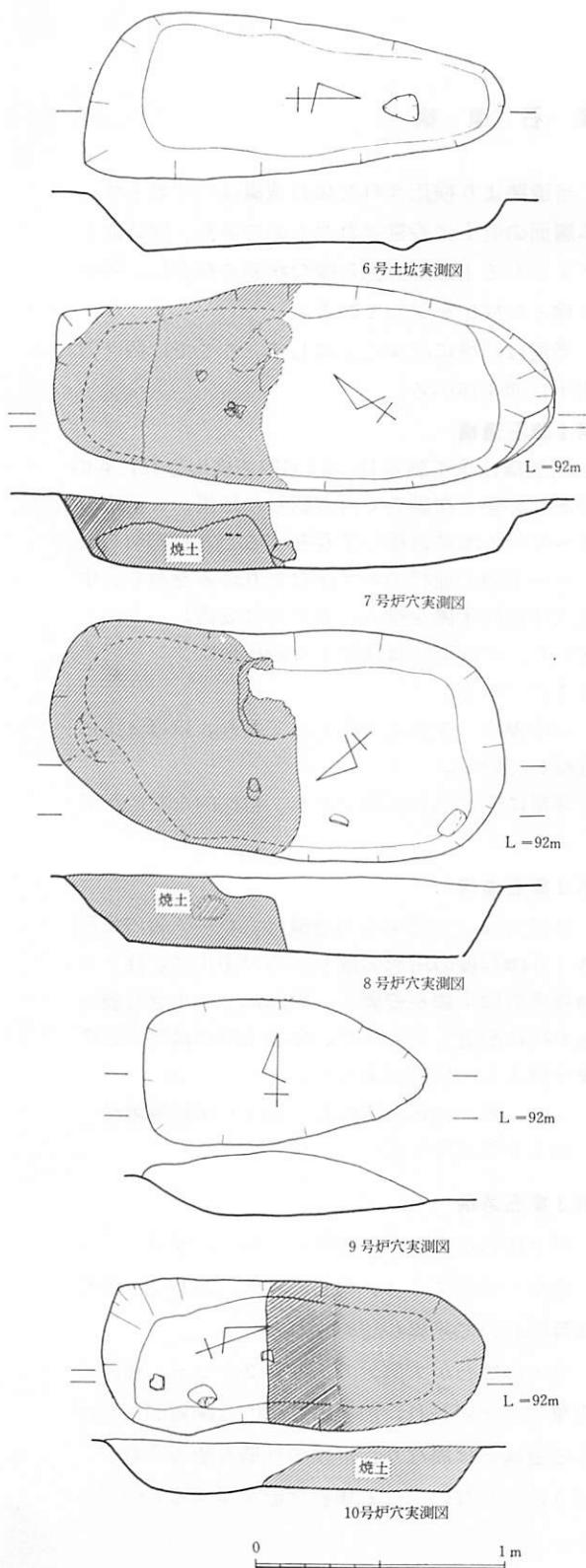
遺構は炉穴が8基、土塚が2基^{注1}で、単独のもの、あるいは複合したもの（第1～5号）があり、後者は熊本県久保遺跡出土のヒトデ状に切合関係のある炉穴^{注2}と類似している。以下、各遺構の概略を述べる。

第1号炉穴

長さ約3×0.8m、深さ約1.5cmを測り、長軸方位をN-5°-Eに向ける。南側に焼土をもつ。

第2号炉穴

長さ約1.5×0.7m、深さ約25cmを測り、長軸方位をN-6.5°-Wに向ける。東南側に焼土を有し第1炉穴を切っている。出土遺物



第6図 第6-10号土塙・炉穴実測図

は条痕文深鉢形土器の底部片を床面で確認した。

第3号炉穴

長さ約 1.8×0.8 m、深さ約 40 cmを測り、長軸方位を N-20°-E に向ける。東北側に焼土を有する条痕文土器の口縁部片が出土した。

第4号炉穴

長さ約 2×0.9 m、深さ 40 cm測り、長軸方位を N-44°-W に向ける。西北側に焼土を有する。第5号炉穴により切られ、条痕文土器の口縁部片が出土している。

第5号炉穴

長さ約 2.2×0.8 m、深さ約 30 cmを測り、長軸方位を N-80°-E に向ける。北側面から東側にかけて焼土を有する。

第6号土塙

長さ約 1.5×0.6 m、深さ約 20 cmを測り、長軸方位を N-S に向ける。焼土はない。

第7号炉穴

長さ約 2×0.9 m、深さ約 25 cmを測り、長軸方位を N-30°-E に向ける。西北側に焼土を有し、土器小片が出土した。

第8号炉穴

長さ約 1.8×0.9 m、深さ約 30 cmを測り、長軸方位を N-50°-E に向ける。東北側に焼土を有する。

第9号土塙

長さ約 1.2×0.6 m、深さ約 10 cmを測り、長軸方位を E-W に向ける。焼土はない。

第10号炉穴

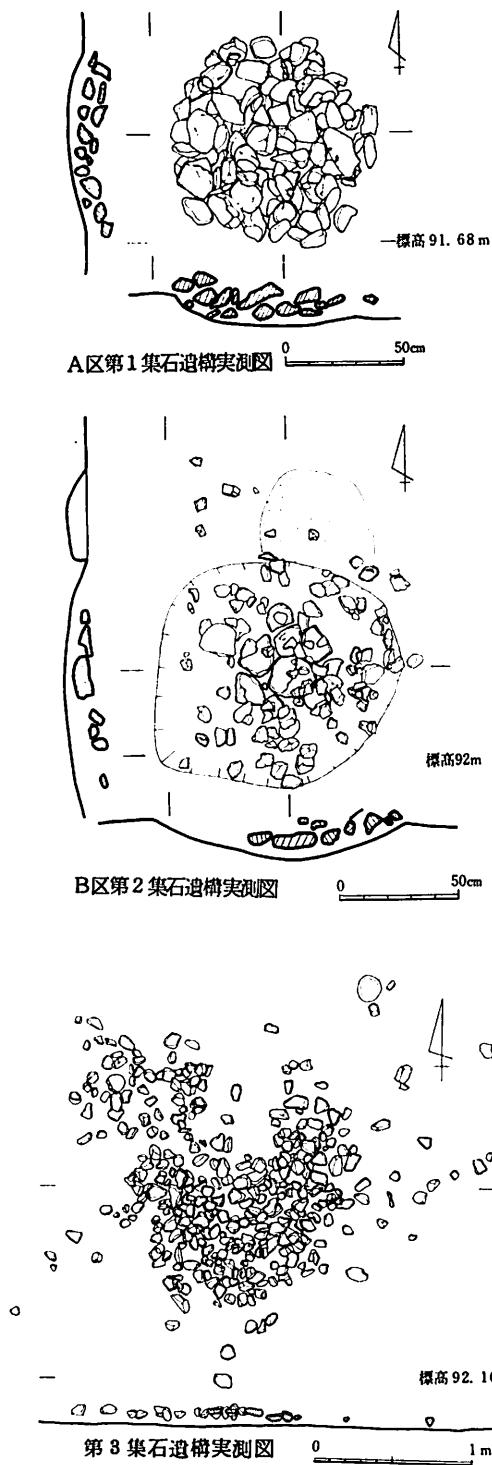
長さ約 1.5×0.6 m、深さ約 20 cmを測り、長軸方位を N-20°-E に向ける。東北側に焼土を有する。

注 1. 当遺跡で確認した 10 基の遺構について
全て楕円形のプランをもち土塙状を呈するが、土塙内的一部分に厚く堆積した焼土を有するものを炉穴とし、他の土塙とは
区別した。

注 2. 久保遺跡（櫛島遺跡編）

熊本県文化財調査報告書第 18 集

熊本県教育委員会 1975



第7図 集石遺構実測図

集石遺構

当遺跡より検出された集石遺構はいずれもローム層面の直上に設営されたものであり、同時期と考えられる土塙群を囲む様な状態で存在し、各々に異った様相を呈している。

考察は別稿に記すことにして、ここでは個々の出土状態を述べる。

第1集石遺構

当遺構は第1調査H-20G内で検出されたものであり、第2次調査で再確認した結果、A区南の1~5号土塙に近接して存在することが判明した。

ローム層に皿状のわずかな掘り込みを有し、中に大小の河床礫を投入、あるいは安置したものと思われ、その形状は径約1mの円形プランを呈するものである。

河床礫はいずれも火を受けており、ほぼ2段に堆積している。

非常に安定した状態であり、意図的な設置が考えられる。

第2集石遺構

B区北部に位置する当遺構は、ローム層内に深さ10cm程度の円形の掘り込みの中央に、径20cm程度の扁平礫を安置し、周囲にやや小さな礫を花弁状に配置したもので、配石上部には挙大の焼礫を投入した状態であった。

なお、掘り込みと隣接して約10cm程度堆積した焼土を確認した。

第3集石遺構

第2集石遺構の西に位置しており、前述の2集石遺構と比較すると、集石の状態、掘り込みの有無等において差異が認められる。

挙大の焼石が大部分であり、2×2mの範囲に投棄したと思われ、前者の意図的な配置がうかがえる遺構とは異なり、堆積の状態も認められず、掘り込みもない単なる集石状態を呈するものである。

2 遺 物

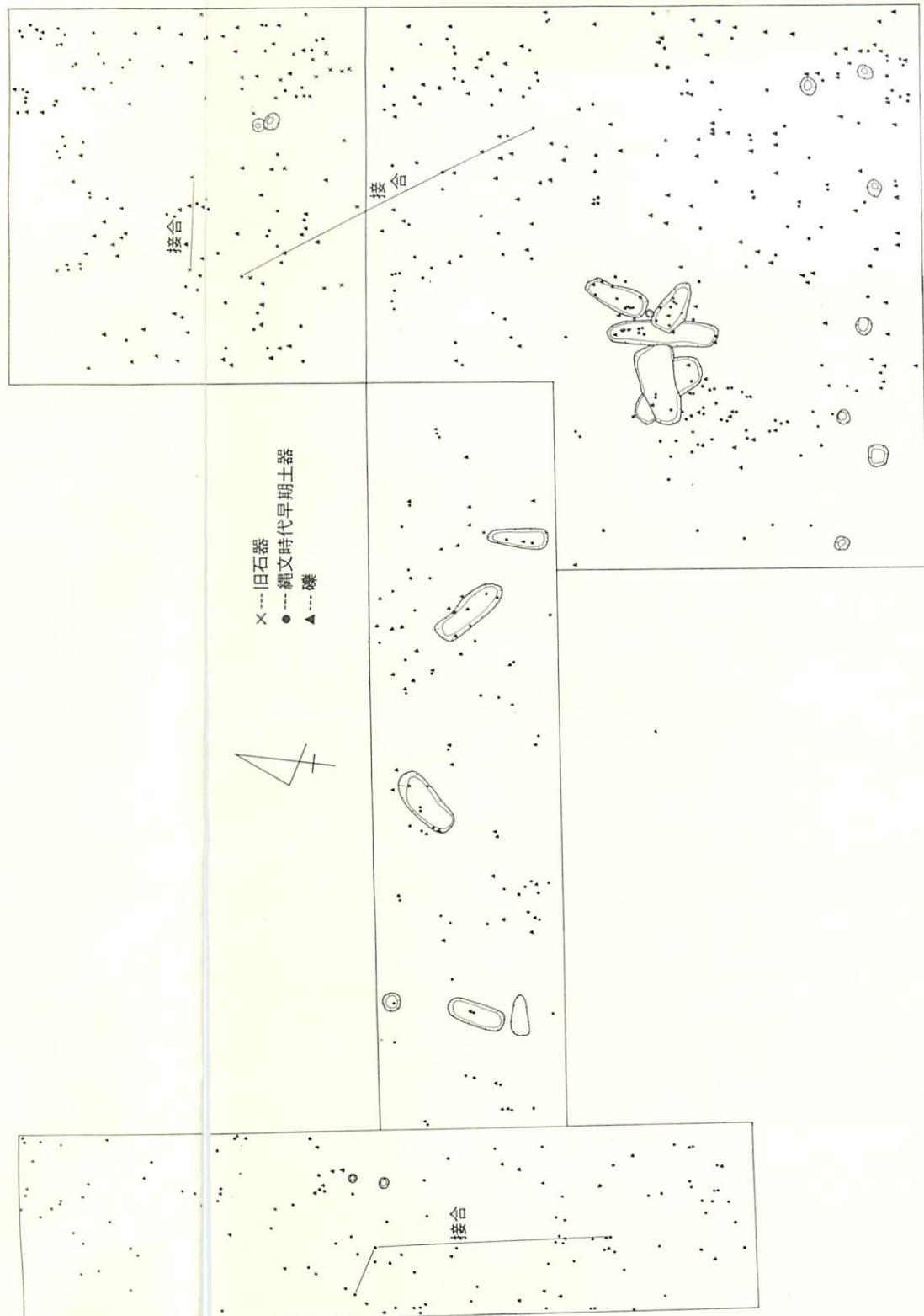
野田山遺跡からは、縄文早期の無文、条痕文土器が出土し、その中でも条痕文土器が主体となる。本遺跡に近接する挾間町下黒野遺跡では、無文、条痕文土器に伴なって押型文土器が出土しているが、本遺跡では押型文土器の出土はなかった。

なお、本遺跡の出土遺物はおおきく、3分類することができる。第Ⅰ類は、口縁下のコブ状突起を施されたもの。第Ⅱ類は口縁部直口するものとやや外反気味になるもの、第Ⅲ類は口縁部が内傾し大形で厚手のものである。また、Ⅱ類Ⅲ類土器については、異った出土地点からの接合も数例であるが確認した。(第8図参照)

第Ⅰ類土器(第9図 ①～③)

発掘区内より出土のもので、口縁直下にコブ状突起を付しているものは3点のみである。

①の口縁部は内傾気味で、内外共に条痕文を施している。色調は暗黄色でスミ付着、②③の口縁部は直口気味で、色調は赤褐色、②の内面に条痕文、③は無文である。①②③の胎土は砂粒、黒雲母が混入、焼成も良好、器壁は厚手のものである。



第8図 野田山遺跡遺物出土分布図

第Ⅱ類土器（第10図 ①～⑩）

Ⅱ類土器内にも条痕文を施しているもの①～⑤⑦⑧⑨⑩⑪⑫と無文のもの⑥⑬⑭⑮⑯がある。また、①～⑩までは、ほぼ口縁部直口になるものと⑪⑫⑯は口縁部が外反気味になるものと⑪⑫⑯は口縁部が外反気味になるものに分けられる。条痕文土器も①②④⑤⑦⑯は外面のみに条痕を施しており、③⑥⑧⑨⑩⑪は内外面に条痕を施している。⑤⑥は口縁端部に径約1cmの補修孔を施しているもので、この2点のみである。Ⅲ類土器内の条痕文は貝殻とは異なる施文貝で条痕を施した形跡がある。色調は赤褐色から黄褐色を呈し、胎土は黒雲母、砂粒を混入、焼成良好である。

第Ⅲ類土器（第10図 ⑩～⑩）

Ⅲ類土器は口縁部内傾気味で胴部は幾分ふくらみをもち、器壁は厚手、口径も大形である。⑩の内外面に条痕文を施し、⑪⑫は無文である。復原口径は⑩の約25cm、⑪の約28cm、⑫の約36cmを測る。⑩⑪⑫は赤褐色を呈し、胎土は黒雲母、砂粒を混入、焼成良好である。

I・Ⅱ・Ⅲ類土器は器面調整するため、指ナデを施している。

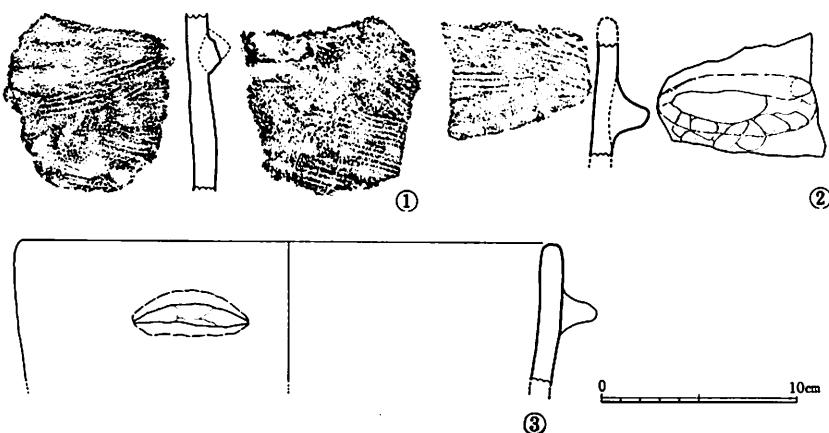
底部（第10図 ⑩～⑩）

尖底の底部である。⑩⑪はやや丸底気味ではあるが、尖底とみなしてよいと思われる。

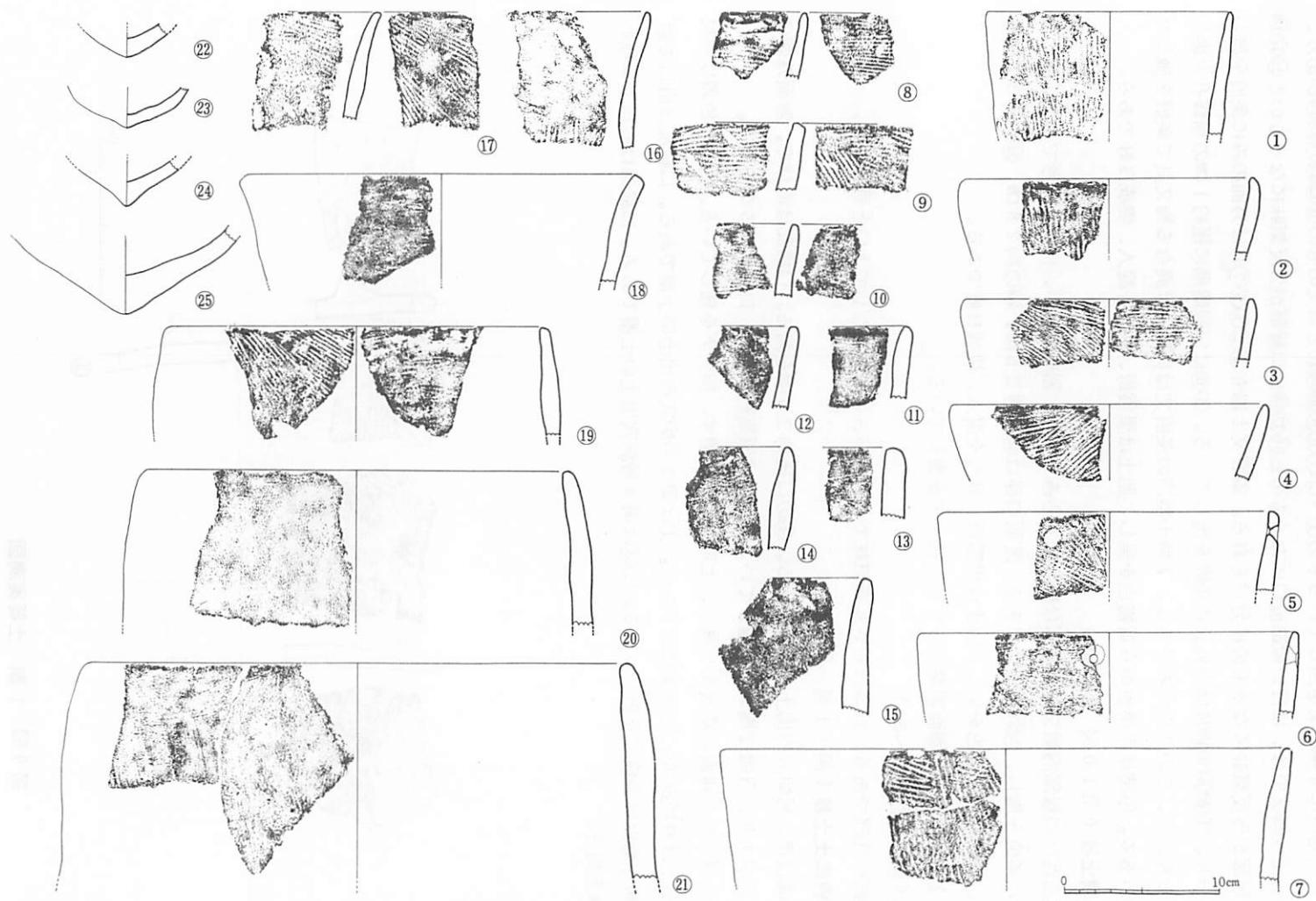
遺構内出土土器（第11図 ①～⑤）

④⑤は第2号炉穴内出土の土器である。④の口径約26cmを測る。口縁部は直口で、器面外側に条痕文があり、内側は指ナデを施している。⑤の復原高約35cm、口径約35cmを測る。

器壁は厚手で、器面に条痕文を施し、上部は条痕を消す。指ナデを施している。④⑤の色調は赤褐色、胎土は砂粒混入、焼成は良好である。①は第3号炉穴内出土の土器である。口縁部は直口で器壁が薄く器面に条痕文を施している。②③は第4号炉穴出土の土器である。口縁部は直口で口径約20cmを測る。

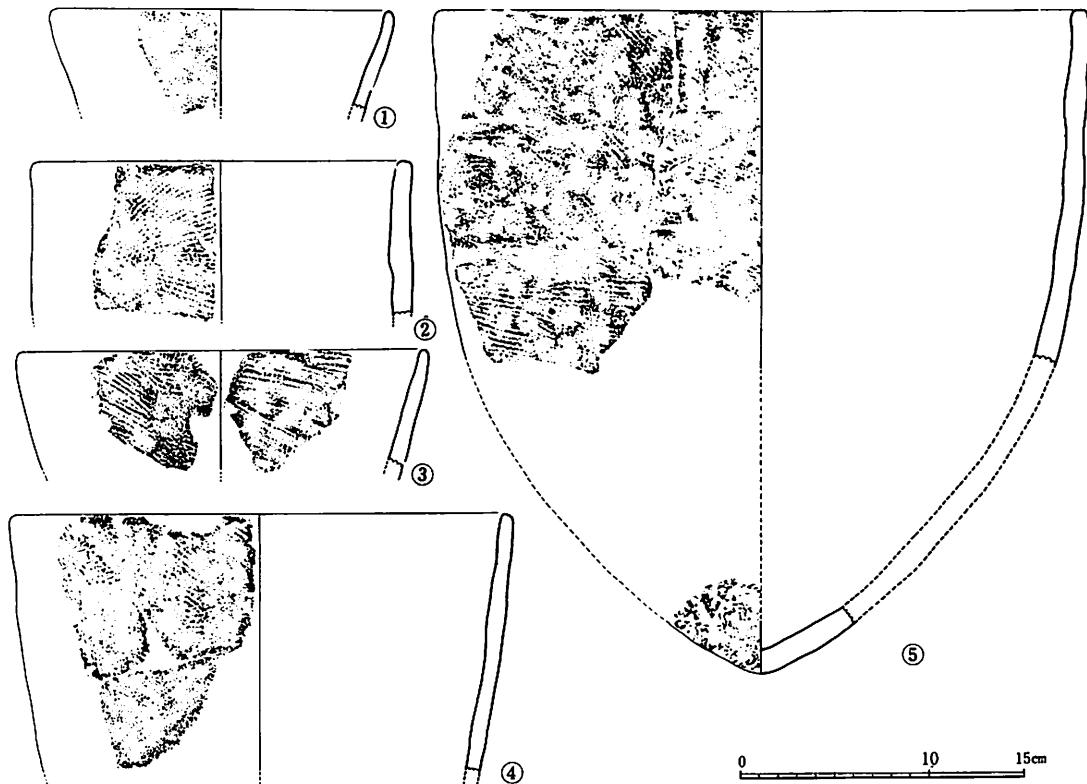


第9図 I類 土器実測図



第 10 図

II 類 (①~⑯) · III 類 (⑯~⑰) · 底部 (⑰~⑲) 土器実測図



第11図 遺構内出土土器実測図（①-3号炉穴・②・③-4号炉穴・④・⑤-2号炉穴）

②は器面外側に条痕文があり、内側は指ナデを施している。③は器面内外共に条痕文がある。②③の色調は赤褐色、胎土は砂粒混入、焼成良好である。炉穴内出土の土器は少量であるが、第2号炉穴の出土遺物は床面で確認された。①～⑤の出土遺物は第Ⅱ類土器である。

旧石器時代

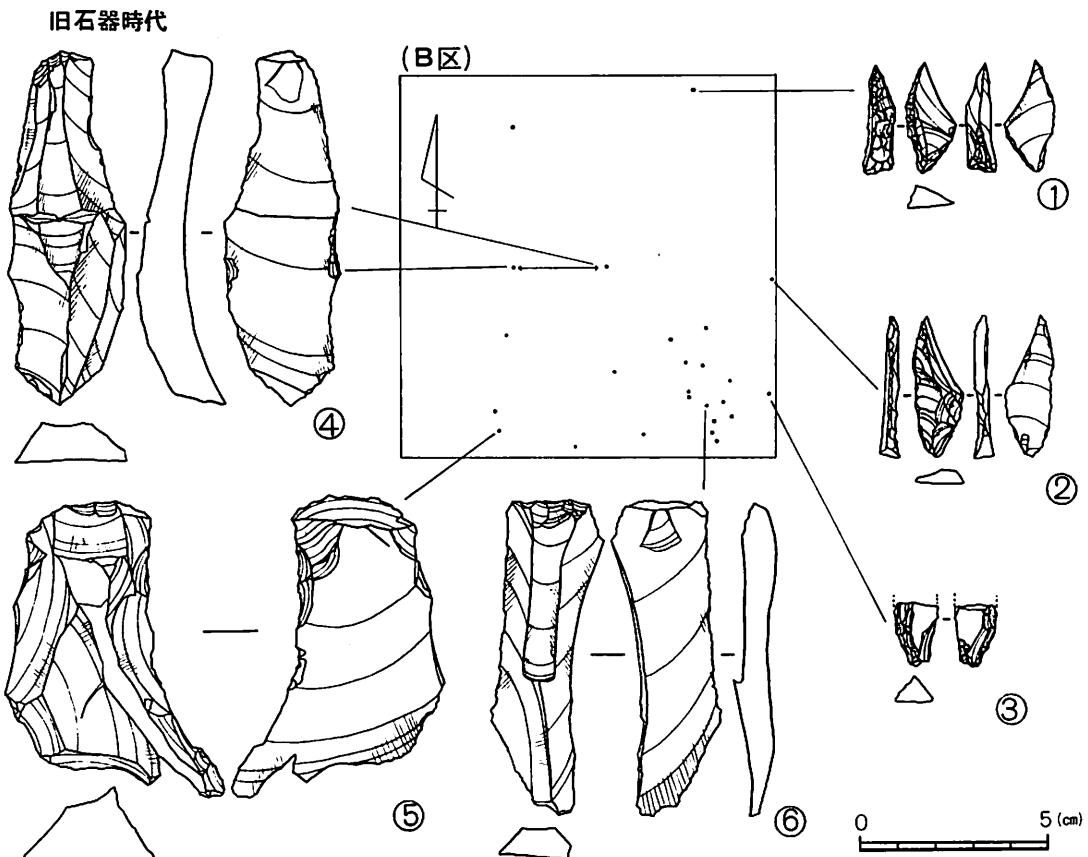
当調査ではB区全体、D区の北、南端について旧石器時代の発掘を実施した結果、ローム層下10cm程度で遺物包含層を検出した。

以下、遺物の概要である。

①・②は、縦長剝片を素材とした九州型ナイフ形石器で、基部には細かい調整が施されている。①・②ともホルンフェルス製である。

③は基部だけであるが、調整状況、断面より三稜ポイントと思われる。ホルンフェルス製である。

④・⑤・⑥は比較的大型の縦長剝片で、いずれも打面を有する。



第12図

野田山B区出土旧石器実測図

④は接合資料で、縦長剝片のほぼ中央部を折損したものであり、剝片利用の好資料である。④・⑥については、側縁に使用痕が見られ、石刃とも考えられる。全てホルンフェルス製である。

なお、D区でチャート製のスマールブレイドを打削したと思われる石核1点が出土している。ホルンフェルス製の石核は未出土である。

| 区 | 名称 | ナイフ形石器 | 三稜ポイント | 石核 | 石刃 | 搔器 | 二次加工石器 | 縦長剝片 | 横長剝片 | 他 | 石質 |
|----|----|--------|--------|----|----|----|--------|------|------|---|---|
| B区 | 2 | 1 | 0 | 4 | 0 | | 2 | 1 | 2 | 5 | ホルンフェルス 11. 頁岩 1. 硅板岩 3. 安山岩 2. |
| D区 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | | 2 | 2 | 3 | 4 | ホルンフェルス 1. 頁岩 2. 安山岩 4. 硅板岩 4. 黒曜石 1. |

表1. 野田山遺跡B・D区出土旧石器時代遺物一覧

Ⅴ ま と め

1 造 構

県内における縄文時代早期の造構は、野津町菅無田遺跡の焼石炉、挾間町下黒野遺跡の花弁状に配石した炉跡等があるが、当遺跡出土の炉穴は県内では初見のものである。^{注1} ^{注2}

土 坡・炉穴

当遺跡で検出した土坡・炉穴は10基であり、うち8基が片方に比較的厚く堆積した焼土を有する炉穴である。1～5号炉穴の切り合い以外は適当な間隔をもって設置されている。全体に、形体的に長楕円形を呈し、炉穴床面のやや深い片面に焼土を有し、半数近くが焼土面を北に向けるといった企画性を見出すことができる。

これら炉穴のもつ性格等については初見のものでもあり不明な点が多いが、片方に厚く堆積した焼土を有することから短期間に何度も炉穴内で火をたいたものと思われ、埋葬、あるいは食物貯蔵に使用されたとは考え難く、関東地方を中心として発達した同期あるいは前期の炉穴（ろあな）的要素が強いと思われる。

^{注3} 炉穴については、長楕円形、ある不定形状を呈するものが多く、一方に火をたいたと思われる焼土を有することが特長であり、また、炉穴近辺に集石遺構を伴う例が多いことから、炉穴内で礫を焼き、付近でいわゆる蒸焼的な食物調理が行われたと考えられており、炉穴内に焼石のつまつたもの、あるいは炉穴内の焼石の間に木炭片が検出された例が見られる。

また、このほかに土器焼成、土器を媒介とした烹煮の場が考えられているが、後者については、当遺跡2号炉穴内で比較的大型の尖底土器の出土もあり、可能性があるが、1例のみでもあり、限定は困難である。

集石遺構

当遺跡より出土した集石3基は各々異った性格を有する。第1集石遺構は、県内旧石器時代炉跡の形体を継続したと思われる円形プランに礫を積んだもの。第2集石遺構は、近接した位置にある下黒野遺跡で出土した。花弁状に礫を配置したものを基礎として、上に小礫を基礎部分に積み上げて一種の蒸焼が行われたと考えている。下黒野遺跡では土坡の出土はないが、小礫を焼くために設営されたとも考えられる。

第3集石遺構は、こうして使用される小礫の保管を意味するものか、使用後の単なる廃棄場のいずれかであろうが、焼礫が多い事から見ると、後者の感が強い。

柱穴

適当な間隔をもって設営された土坡・集石は、ほぼ台地中部にあたり、柱穴は台地南傾斜地にあたるA区南端に集中して見られた。

柱穴は浅く、位置関係も調査範囲の中のみでは決定できなかったが、住居跡の存在が考えられ、土坡・集石とは明らかに区別された場所に設置されたことがうかがえる。

注1. 「野津川流域の遺跡」 昭和51年 野津町教育委員会

注2. 「下黒野遺跡」 昭和49年 大分県教育委員会

注3. 炉穴は九州では熊本、長崎県でも確認されている。

2 遺 物

土器

野田山遺跡出土の縄文早期の無文、条痕文土器は厚さ 20 cm 程度の第Ⅲ層暗褐色土層（下黒野遺跡第Ⅳ層に相当する）に包含されている。土器と共に伴すると思われる石器類の出土及び押型文土器の出土は皆無であった。出土土器は器面に縦・横・斜方向の条痕文土器と無文土器が主体となるが条痕文が圧倒的に多い。条痕土器については、貝殻条痕とは異なり、平行に走る条痕をもつことから貝殻以外の櫛状の施文具を使用したことが考えられる。条痕文土器、無文土器の形態は第Ⅳ章でのべたように、Ⅲ分類できるが、概していえば、尖底直口の土器で器壁厚手のものが主体をなしている。

県内の縄文早期の遺跡では、無文土器と押型文土器が共伴する下黒野遺跡。条痕文土器と無文土器と、押型文土器を共伴する白杵市東台遺跡。無文土器と押型文土器を共伴する杵築市・稻荷山遺跡などがあげられる。特に本遺跡に近接している下黒野遺跡については、第Ⅲ層黒褐色土層より早水台Ⅰ式・第Ⅳ層暗褐色土層では、無文土器が少量であるが出土している。また、九重町二日市洞穴の第1次～第3次調査では、第9文化層まで確認されており、第8文化層では、田村式土器、第4文化層では、早水台、稻荷山式土器のほか無文土器がそれぞれに共伴する（無文土器1式）、第5文化層では尖底の条痕文（斜方向）、押型文土器が出土しており、東台遺跡などが同層に比較されている。

第6文化層では、無文、条痕文土器が共伴し、第7文化層は、丸底無文土器である（無文土器Ⅱ式）。第9文化層では、条痕文土器が出土している。特に、第6、第7文化層は無文土器Ⅰ式として押型文土器を共伴しないもので、押型文土器よりも先行する時期にあるものと考えられている。これらを考察してみると、本遺跡の土器は層序からみても明らかに下黒野遺跡の第Ⅲ層黒褐色土層の押型文土器よりも先行する時期に存在しており、また、形態的に底部尖底を呈することから、二日市洞穴第7文化層の円底よりは新しい様相をもっと考えられ、むしろ第6文化層に比定されよう。

注 1. 稲荷山遺跡緊急発掘調査 大分県文化財調査報告書第 2021 合輯
—昭和 42 年度新産都区域内緊急発掘調査—
大分県教育委員会 1967

注 2. 二日市洞穴の調査（第 1～3 次）
玖珠郡九重町教育委員会 1977

旧石器

ローム層 10 cm 程度下で確認した後期旧石器時代の遺物は、発掘区東部に広がる傾向をみせ、当調査では中心を探りえなかった。

遺跡包含層からは、九州型ナイフ形石器のほか、大型の縦長剣片・横長剣片がほぼ半々の割合で出土した。石材は大野川中流域に転礫として多く見られるホルンフェルスが主体を占め、石器の大部分の素材となっているが、質の荒い安山岩質の素材は、主として横長剣片に見られ、同質の石器は皆無であった。

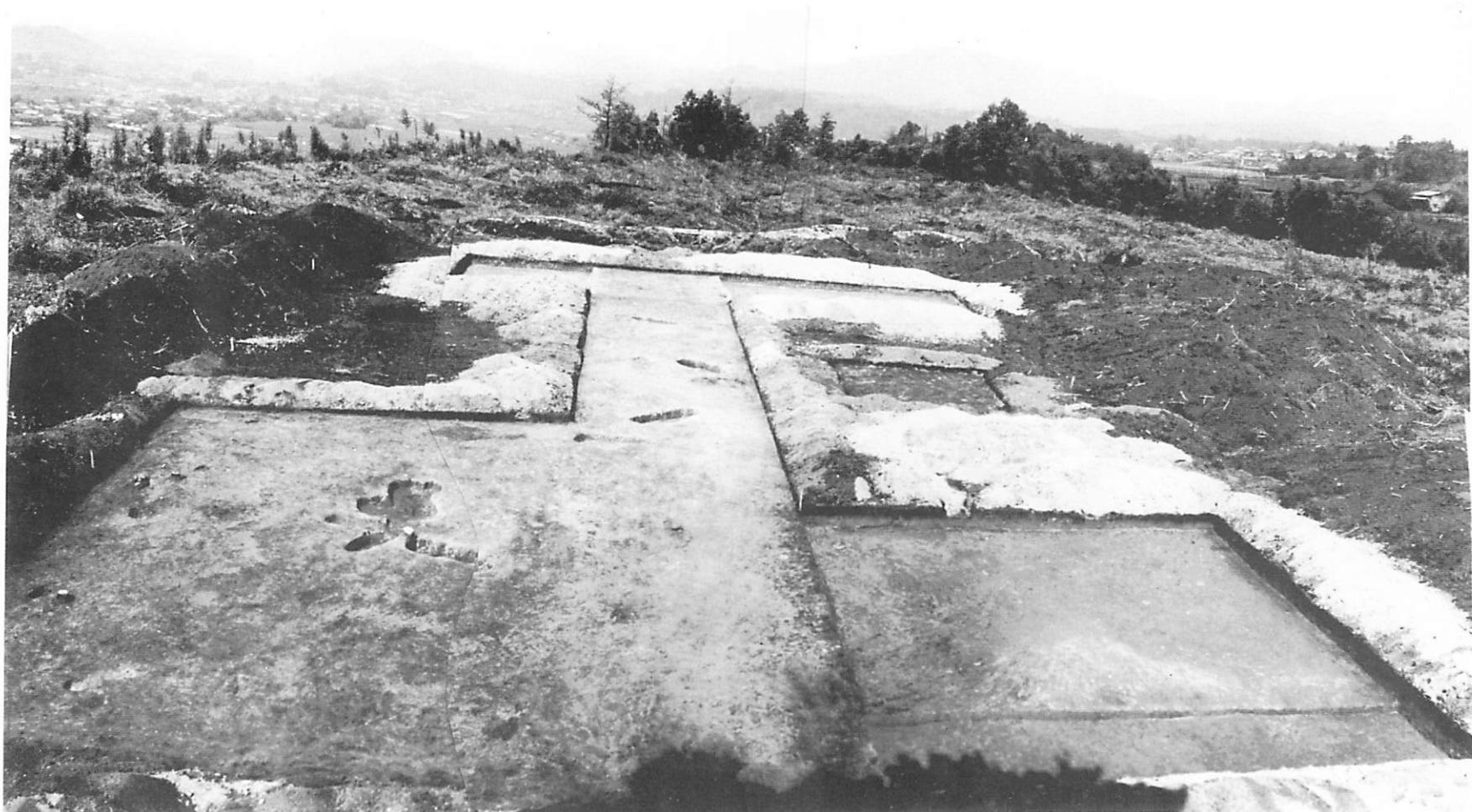
資料が少なく、他遺跡との編年的比較は困難であるが、県内白杵市東台遺跡、挾間町下黒野遺跡、野津町新生遺跡出土石器等に類例が認められる。

注 1. 「東台遺跡」昭和 49 年 白杵市教育委員会

注 1



野田山遺跡 A 地区第 1 次調査全景（東から）



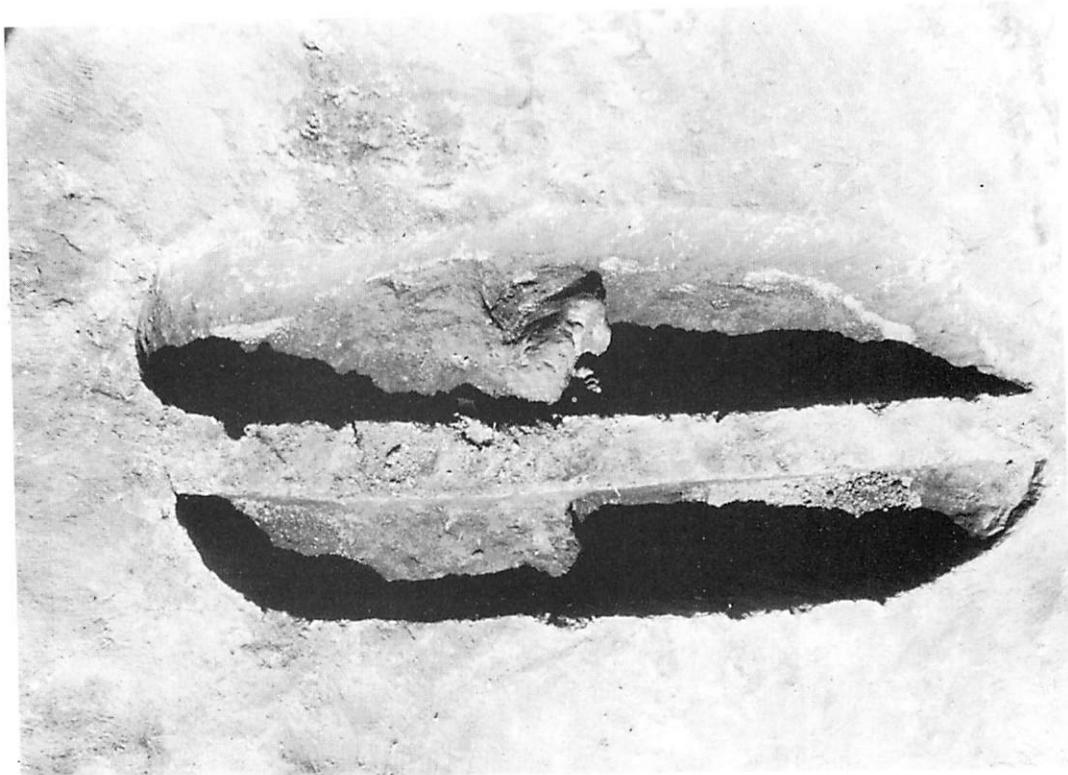
野田山遺跡A地区 第2次調査全景(東から)



第1-5号炉穴 切り合い状態（東から）



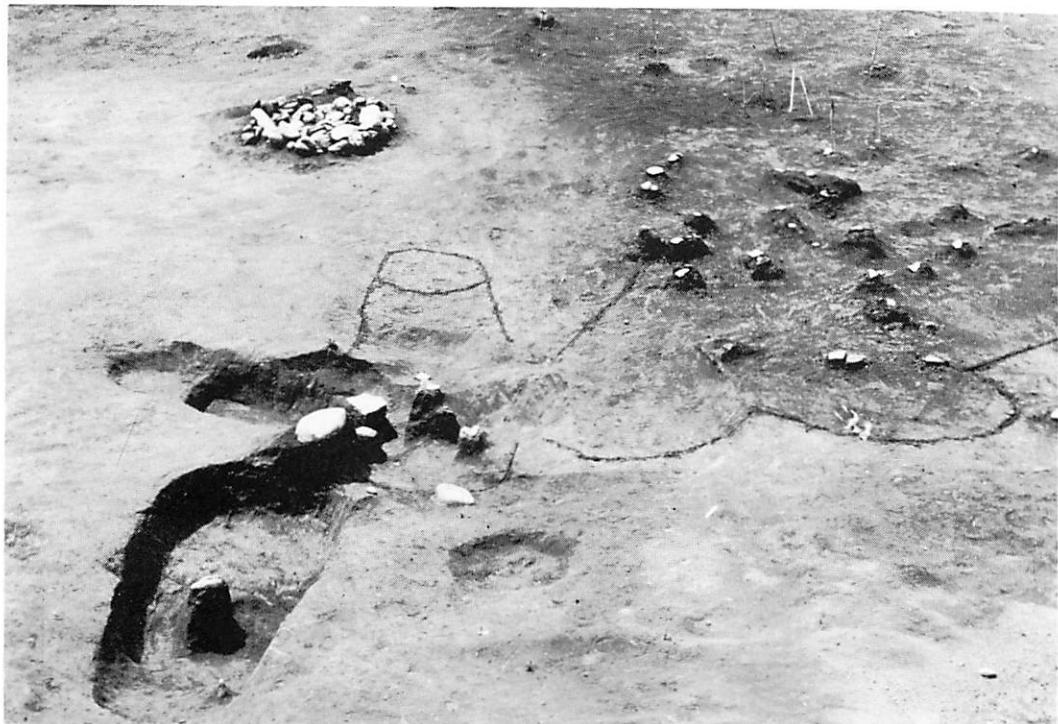
第6-10号土拵
炉穴
(東から)



第7号炉穴（西から）



第8号炉穴（西から）



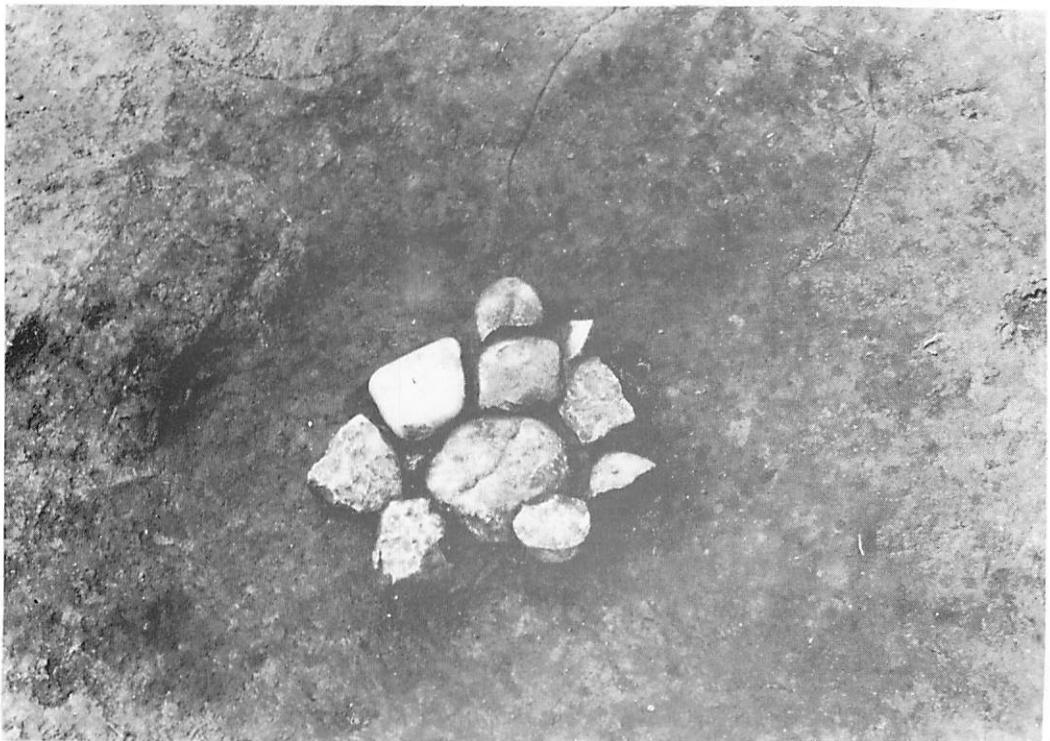
第1集石遺構と第1-5号炉穴検出状態（北から）



第1集石遺構



第2集石遺構上部（南から）



第2集石遺構下部（南から）



第3集石遺構（東から）



発掘風景

野 田 山 遺 跡

昭和 54 年 3 月

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町 2 番 31 号

印刷 大分市府内町 1 丁目 3-19

二豊プリント

TEL 32-8618
